鳩時計

佐々木信子

リビングの鳩時計が「カッコウ」と鳴いて八時を知らせた。まもなく、この鳩時計の送り主のカヨが現れるので、緑はダイニングテーブルに広げた新聞をたたんだ。

この鳩時計は茶色の山小屋風のデザインで、文字盤と指針は白く、縦三十センチ、横二十センチの振り子のない小さなものだった。邸宅にある豪華な作りでもないのに、裏側には「アンティーク鳩時計デラックス」とラベルが貼ってあり、緑はいかにもカヨからのプレゼントだと思った。

それに、十二時の文字盤の上の穴から出現し時刻を知らせるのは、体長三センチ前後の正体不明の白い鳥なのに、「カッコウ」と自慢げに五回も鳴いて、扉のない穴の奥にギィギィとバックする。昼間一時間に一回の仕事なのに、大役を果たして疲れた雰囲気を演出するのはカヨにそっくりだと思う。

五年前の夏に北部九州に地震が発生したとき、カヨからすぐにお見舞いの電話があった。当時は名古屋に一人暮らしで、自称編み物の講師だった。

「被害はなかったの？　みんな無事なの？」

それまでは年に一度、緑の誕生日に電話をくれるだけだったのに、

「いくつになっても、ミーちゃんが心配なの」

母親のカヨは、緑が七歳のときに離婚して家を出たのに、今でも「ミーちゃん」と親しく呼んでいた。

「古い鳩時計が落ちて壊れただけよ」

緑は電話の相手をするよりも、家の外回りが気になっていた。

「それなら、あたしが鳩時計をプレゼントするわ。こっちのデパートには品数が多いから」
「ネットで同じ物を探すから送らないで。二十年以上動いていたから寿命だと思わないと」
緑は電話を切ってから、今年で三十歳になる息子の小学校の入学祝いに義父が贈ってくれたのだから、二十三年間、時を刻んでくれたのだと気がついた。その鳩時計は重厚感があり、赤い屋根のログハウスが緑の木々に囲まれ、時刻を知らせに現れるのは、本物のカッコウのような声と姿だった。鳴き声の後にはオルゴールが「エーデルワイス」の曲を奏でた。自宅に来たこともないカヨが、よく似た鳩時計を選ぶはずはないので断ったのだった。
しかし、数日後に届いた軽い宅配便の中には、現在リビングで「カッコウ」と鳴く、正体不明の鳥が気泡緩衝材に包まれていた。
「ネットで同じ物を探すつもりだったのに」
プチプチと緩衝材をつぶしながら言う緑に、
「先が短いから、高価な鳩時計はいらないよ。時間がわかればいいさ」
もうステップを持ち出して、セットの準備をしている夫が言った。福岡で暮らす一人っ子の息子が、会社の近くにマンションを購入して以来、「この家は無人になる」が夫の口癖になった。
「俺、独身主義だから、この広さで充分だ」
息子は1LDKをローンで購入したときに言った。夫の姉妹や同僚たちの離婚を目の当たりにしたせいか、
「結婚なんか面倒くさっ、コンビニやコインランドリー、デパ地下も近くにある。もう車だって買わないよ」
たしかに的を射ていると緑は思う。転居と同時に自転車も手放し、彼の移動手段は徒歩だけで充分のようだ。
夫は給湯器、冷蔵庫など、買い替えのたびに、「先が短いから低価格の物を」と言った。六十七歳の夫と六十一歳の緑の、今後の寿命はわからないけれど、夫の意見を尊重したことは一度もなかった。「先がない、先がない」と唱えていると、火をつけた線香がだんだんと短くなるのが脳裏に浮かんで嫌だった。
緑が二十八年間暮らす家は、地元の建設会社が建築分譲した、集落の外れの住宅団地にある。入居当時は子供たちの姿もあったが、今は高齢夫婦の二人暮らしの家庭が多かった。しかし、春にはヤマザクラやツツジが咲き、秋の山々の紅葉は自宅から眺められた。
リビングの入口のドアの奥から、ペタンペタンとカヨの足音が聞こえ、途中で途切れるのは、廊下の柱に乾皮症の

背中をこすりつけて掻いているからだ。
「おはよう。あら、おとーさんは」
カヨはドアを開けると同時に、緑の夫の椅子に目をやった。名前で呼ぶことはなく、緑や帰省した息子がそう呼ぶからか、カヨも同居以来、「おとーさん」と呼んでいた。
窓の外からは繁殖力が強いリュウキュウアサガオが、竹の支柱を紫の花で覆い隠し、リビングの中を覗いている。泣いているように見えるのは朝露で光っているせいだろう。
その花はカヨが三年前に一鉢だけ買ってきたが、今では庭の四方八方に広がっていた。カヨが挿し木で増やして近所に配った苗も丈夫で、隣の家では家主が亡くなった犬小屋を包み込み、ウメの枝を伝って二階の瓦まで届いていた。
化粧をすませた今朝のカヨの服装は、黄色地に赤いハイビカスが咲いているワンピース姿だ。太った体型をカバーするためか、胸から下はフワリとしたデザインがお気に入りだった。庭の花の手入れをするときも、その上にエプロンをして赤い長靴を履いていた。先日は裾がサザンカの枝に引っかかり、小さな黒い三角形のショーツが、申し訳なさそうに大きな臀部に張りついていた。
「実家に出掛けたわ。お義父さんがデイサービスの日だから、いつもより早めにね」
九十二歳になる義父は隣の市で一人暮らしをしていたが、四年前に脳梗塞を発症して以来、週に二回デイサービス所に通っていた。義母が十年前に病死してからは、夕食の宅配サービスを受け、他の家事は一人でしていたが、再発後は夫が通って手伝うようになっていた。
「おとーさん、最近は実家通いが多いわね」
カヨは冷蔵庫からスライスチーズを取り出して、食パンの上に載せながら言った。一人だけの遅い朝食の用意だ。
「勤めていた頃はかまってやれなかったから」
夫は六十歳で退職後、再雇用されて、五年間は勤める予定だったが、義父の再発後に六十四歳で退職していた。
「ほかにも通う場所があるんじゃないの」
カヨは緑の顔を見てニタリと笑うと、トースターのスイッチを押した。次は粉末のコーンスープの銀色の小袋を、前後に揺さぶって封を切り、信楽焼のマグカップに入れるとポットから熱湯を注いだ。八十一歳の彼女は高齢者なのに朝寝坊だ。朝食後は一時間程度の散歩と言うが、ほとんどは近所の老人とのおしゃべりで、午後は気が向けば庭仕事をして、それ以外は自分の部屋で過ごしていた。だが、夫が在宅のときはリビングに顔を出し、「おとーさん、おとーさん」と頼りにしているようだった。
カヨは三年前に、半世紀暮らした名古屋の生活を引き払

い、緑と同居を始めた日に、
「これは食費、毎日同じ物を食べるのだから。お世話になります」
と、一万円札を夫婦の前に差し出した。当時は、カヨの多い荷物の落ち着き先を確保するために、物置で埃まみれになっていて、彼女の食費のことなど考えてもいなかった。
以来、月の始めには一万円札を一枚ヒラヒラさせて緑に渡した。そして、「スライスチーズを買っておいて。もう、三日もお魚料理の夕食が続くわ」などと、緑さえ気づいていないことを言った。
電話で話していたときは思いやりのある母親という印象だったが、同居してみると歯に衣着せぬ性格だとわかった。しかし、カヨにとっても不満があるから、ストレートな感情を緑にぶつけるのだろう。昔の子供部屋にいるときはよかったが、リビングへ来ると指図をするようになった。
「食洗機の音が高くなったのは、買い替え時期が来ているのよ」
「スーパーのパンでなく、専門店のパンがおいしいから」
と、カヨにとってヒラヒラの一万円札効果は無限大のようだ。生返事をしていても、家庭内の勢力図がジワジワと塗り替えられて、緑の領域が狭くなる気がしていた。
後悔しても無駄だとわかってはいるが、なぜカヨに同居を提案したのか、緑はこめかみを押しながら考えていた。
「子供部屋は空いているし、元気なうちに帰郷させたがいい。独りぼっちなんだろう」
カヨと会ったこともない夫が言った。
「名古屋には友人、知人はいるみたいよ」
緑は両親が離婚する七歳までは、カヨと一緒に暮らしていたが、高齢になった母親との同居には戸惑っていた。夫は実家で一人暮らしの父親の世話をしていたので、緑への助言のつもりだったのだろう。
「名古屋に骨を埋める覚悟じゃないの。もし、帰るなら伯母ちゃんの家よ、実家なんだから」
夫には反論していたのに、なぜ同居を提案したのかわからない。緑は共働きの両親との三人家族だったが、カヨが家を出てからは、近所に住む父方の祖母が家事をしに来ていた。祖母は父が帰宅するまで緑と一緒にいてくれたので、カヨが母親との実感はなかった。
別離後初めて会ったのは伯母の家だった。金食い松と呼ばれる松の枝を、庭師が二人で剪定していた日だった。
九年間の空白を埋めるかのように、カヨがにじり寄って抱いても苦しいだけだった。彼女の胸は、道端に転がった熟柿とみかんを踏みつけたような臭いがして、こんな人が母親のはずがないと思った。

伯母宅での昼食を断って帰宅するバスの中では、カヨからの高校入学の祝い袋を握りしめていた。そして、途中から乗車してきた母娘連れを眺めていると、突然涙が流れてきた。

母親の演技が上手で嫌な臭いの女だったのに、別れるとまた会いたくなった。その理由は、髪の毛よりも細い糸でカヨと繋がらせている、得体の知れない何ものかの仕業のようだった。カヨを思うと湧き上がる不気味な感情を振り払おうと、頭を振り続けていたらバスの窓ガラスに顔面をぶつけてしまった。

その感情は、緑が母親になってから思うに、胎内で丸まっていた頃のカヨのDNAの仕業かも知れない。十一歳の頃、臍をほじくって化膿したことがあった。病院では臍の上に傷パッドを×印に貼られた。あの行為はカヨのDNAを無意識に放り出したくなったのだろうか。通院の帰り道に祖母がソフトクリームを渡しながら、

「今度、臍をほじくったら、長い腸が飛び出して死んでしまう」

と言うのを恐ろしく聞いて以来、臍にはまったく触らなくなった。体内から飛び出た腸は生温かく、その勢いのまま緑を羽交い絞めにしてしまう気がした。

中学生まではカヨを尊敬した部分もあった。半世紀も前、都会で生活することは厳しかったはずだ。化粧品店に数年勤めただけで、なんの資格もない二十代の女性だったのだから。しかし、成人後に会う回数が多くなると、矛盾点がいくつも浮かび上がった。自称「編み物教室の主宰者」だったが、名古屋の繁華街のマンションに住み、年に何回も有名温泉へ旅行していた。湯煙をバックにしてモデルのように、前足と肩を突き出した写真は、いつも一人だけだった。カヨの視線の先でシャッターを押す人物は男性だろうと思った。

緑が知っている手芸店では、店主が店の隅で背中を丸めて編み棒を動かしていた。

「田舎とは教室の規模が違うだろう。中年女性に人気の『編み物王子』がテレビに出演していたけど、イケメンで俳優みたいだった」

カヨが贈ってくれた漬物を食べながら、名古屋のマンションの家賃の相場を尋ねると、夫はご飯粒を唇につけたまま言った。しかし、緑が幼い頃にカヨが家で編み物をしていた記憶はなかった。ただ、顔の手入れは欠かさずしていたが。

緑の父が先に亡くなり、緑一家との同居を拒んだ祖母が、老人保健施設で亡くなった頃から、カヨはひと月に一度は

電話をして、
「ミーちゃん、かわいそうね。父親とおばあさんまで亡くして。これからは、あたしを頼ってきてもいいのよ」
と言ったが、そのうち電話の中身はだんだんと変化しだした。
「最近ね、故郷の夢ばかり見るのよ。夢の中でヤマモモやアケビの実を食べているの。懐かしくてたまらないわ」
カヨは高齢になり故郷が恋しくなったのだろうが、緑は鈍感なふりをしていた。
「ヤマモモやアケビは、スーパーの果物売り場でよく見かけるわ」と言うと、受話器の奥のカヨはしばらく沈黙していたが、ため息と同時に電話を切った。
その後もカヨからの電話は間隔が短くなり、ある時など、
「ちょっと早く起きたから、忘れないうちに尋ねておこうと思ってね」
と、朝の四時に暢気な声でかけてきた。コール音に驚いた隣のベッドの夫は、上半身を斜めにして会話を聞いていたが、病身の父親でないとわかると、背中からベッドに倒れ込み布団を被った。
「緑の実家は無人のままじゃないの?」
カヨが忘れて困るような話でもなかった。
「おばあちゃんの一周忌の後に、従兄弟が買ってくれたわ。古い家だったけど、定年後は田舎暮らしがしたいからって」
「足元見られて買い叩かれたんじゃないの?」
それだけで電話は切れた。
「大丈夫か。俺の親父より若いんだろう? 一人暮らしが長いと認知症になるらしいから」
夫が布団の中から言ったが、緑は次の電話の中身が気になり眠れなかった。
そして、二日後には、
「編み物教室は十年前から生徒が来なくなって、年金と貯金で暮らしていたけど、その蓄えも底をついたのよ」
涙声になり鼻をかむ音が聞こえたので、
「卵を茹でているから」
と緑は電話を切った。
二十年前に伯母の家で会ったときは、
「大きな印刷会社の社長なのよ。新築のマンションも借りてくれたわ」
とスポンサーの存在を明かした。やはり緑の予想通りの暮らしを長くしていたのだ。
「奥さまが病弱だからね……」
だから公認の存在だと言いたいのだろうが、緑は暖房が

効きすぎて頬が熱くなった。
カヨは、カシミヤのサーモンピンクのワンピース姿だった。絨毯の上で足を崩していたが、黒の模様入りのストッキングで二匹のニシキヘビが絡みあっているようだった。そして、背後には焦げ茶色の毛皮のコートが掛かっていた。高く結い上げた茶色の髪は、廊下へ出るときは鴨居につかえそうだった。編み物の講師にしては爪が長すぎた。シャンプーは美容室に通い、顔の手入れはエステサロンですると言った。社長を独占するには、妖艶な美をキープすることらしい。
「いい人に巡り合ってよかった」
カヨより一歳年上なのに二人並ぶと母親に見える伯母が言った。まるで、緑と同じように今知ったような口ぶりに腹が立った。この姉妹にとっての善人とは、衣食住に困らず贅沢をさせてくれる人のようだった。居心地が悪くなり帰宅しようと、玄関でスニーカーを履く緑の隣には、カヨのヒョウ柄のロングブーツが横たわっていた。
伯母の家で会った頃は、カヨの暮らしぶりもよかったのだろう。その後はカヨから連絡があっても、数回に一度だけ会いに行っていただけだった。
しかし、数十年も経過すると、人も環境も変わってしまうから、七十六歳で妖艶な女を演じるには無理がある。
「お金がないから洋服が買えないし、病院にも行けないから、体はガタガタよ」
カヨからの電話は愚痴ばかりだったが、彼女の特技は他人の心の隙間に、音もなく侵入して、牛耳ることではなかったのか。世話をしてくれた祖母の死と、マンションを購入した息子の件と、緑の二カ所の隙間を探し当てるのは容易だったのだろう。
「子供部屋は十畳だけど、暮らしてみる?」
緑の臍の中で眠っていたDNAが、久しぶりに目を覚まし、得体の知れない感情がオンになってしまった。
「そうするわ。うれしい、ミーちゃんと暮らせるなんて」
カヨはこの返事を聞くまで、ずっと緑に電話を続けるつもりだったのか、ハミングしながら電話を切った。

十月になってもリュウキュウアサガオの勢いは衰えず、庭木の枝にまで絡みつき咲いている。道路際に伸びた蔓は塀を乗り越え、隣の家の門扉まで抱き込みそうだったので、午後にでも剪定をしなければと思った。
今日はカヨの通院日だ。近くにバス停はあるのだが、
「バス停にいると、信号で停まった車がジロジロ見るの。田舎では洗練された女性が珍しいからよ。誘われても車には乗らないけど」

カヨの自己中心的な分析につきあう気はないので、緑は面倒でも車で送迎していた。それに、頼まれた買い物にも不満を口にするので、通院の帰途にドラッグストアなどに寄り、本人に購入させていた。

以前は息子の席だったダイニングテーブルの椅子に掛けると、

「まずは皮膚科、ここは予約していたから。次が退屈するほど待つ整形外科ね」

カヨはテーブル上に広げた左手を撫でながら言った。骨粗鬆症の薬を飲んでいるのに、腰痛があり、人差し指と中指の第二関節が曲がっているのが気に入らないのだ。

「おばあちゃんの関節も変形していたわ」

緑が赤いマニキュアをした中指を指すと、

「あら、やだ。手袋もせずに畑仕事をしていた高齢者と一緒にしないで」

カヨは両手を背中に隠した。そして、豊満なバストを突き出すと、

「あたしはねぇ、名古屋では生きるためならどんな我慢もしてきたわ。それに、この顔のおかげでアルバイト先でもモテたのよ。日本人離れした肌の色や、奥二重の目は、東南アジア系の美人に見えるって」

と、また緑が覚えてしまった話が始まった。

皮膚科のクリニックの駐車場は満車だったので、カヨを車から降ろした緑は、駅前の有料駐車場に向かった。今日はここも珍しく満車状態だったが、運よく奥の黒いワンボックスカーが出たので、そこに駐車すると、ダークスーツ姿の中年男性が走ってきた。背は低いが武道家のような体を包んだ上着がはち切れそうだ。

「こんにちは、今日は電車をご利用ですか」

いかつい顔には不似合いな笑顔が不気味だ。

「いいえ、近くのクリニックの駐車場が満車だったものですから」

緑は運転席の窓を少し開けて答えると、急いでドアをロックした。

「新川先生が駅前で演説の予定なので、近くの駐車場をご利用の方々には、声を掛けています」

新川先生とは地元選出の国会議員で、次の組閣では大臣就任の噂がある。今日この駐車場が満車なのは、後援会関係者が利用しているからだろう。

「通院されているクリニックはどこですか。あなたが受診されるのですか」

私服の警官のようだが名乗らずに職質する。

「あのビルにある藤島皮膚科です。母を連れてきました」

そう答えると、彼は南口の白いビルを振り返った。まだ質問が続くと思ったときに、頭上の高架をガタガタと音をたて、電車がギーンとブレーキ音を響かせ駅に着くと、彼は駆け足で駅の北口に向かった。到着した人物のチェックでもするのだろう。

緑は気分転換をしたくて道路地図帳を取り出し、秋になれば高原に出掛けようと思った。

しばらくして、窓ガラスをノックする音に顔を上げると、グレーのパンツスーツ姿の中年女性がいて、その側には視線を落として萎れるカヨがいた。

「どうしたの。診察は終わったんでしょう?」

緑はあわてて車から降りた。

「県警の山口です。こちらの方のお知り合いですか」

ショートカットで日焼けた顔の女性は、カヨの手首を摑んだまま尋ねた。裾の長いワンピース姿の八十一歳が逃げると思っているのか、走ればすぐに転倒してしまうのに。

「カヨさん。いえ、母親です」

「間違いなく日本人ですか」

「はい。同居しています」

カヨの日本人離れした顔つきは自慢だったが、こんなときは不利のようだ。もう駅前広場は人であふれていたが、その中でカヨの風貌に目をとめたのは優秀なのだろう。

「何度も駅の北口から出入りされて、鉢植えを抱えておられたので声を掛けました」

「あたしの大好きな花が安くなっていたから買ったのよ。売り切れる前にね。でも、重いから病院の帰りまで預かってもらおうと、お店に引き返したら捕まったの。この人はハイビスカスを引き抜いて、植木鉢の底まで確認したのよ」

駅の構内にはレストランと菓子店の奥に花屋があり、皮膚科帰りのカヨはバラを数本買うこともあった。

「植木鉢に爆破物でも仕掛けていると思われたのですか。八十一歳の病身の老女なのに」

緑はカヨを守るより、さっきの男性警官への不満も加わっていた。普段なら老人扱いを嫌うカヨはさかんに頷き、萎んだ体が少しずつ膨らんできた。

「イケメンでもない国会議員は見たくもないわ。選挙のときだけコメツキバッタになって。あー具合が悪くなった。死ぬかも知れない」

しかし、カヨの体は元通りになっていた。

「それで、ハイビスカスはどうしたの」

カヨの持ち物は首から下げたポシェットと、たたんだ日傘だけだった。

「返品されました。乱暴な扱いをされた花は枯れてしまうからと」

婦警が悪びれずに言った。いかにもカヨらしい。その花を見るたびに今日のことを思い出すのは、緑だって避けたかった。しかし、花屋は困惑したと思う。

「急患が来たので予約時間が遅れると言われたから、花屋に行っただけなのに」

カヨは皮膚科に向かって歩き出しが、疑われた余韻なのか背中が丸くなっていた。

十月の末になった。緑はそろそろ久住高原へ出掛けようと思っていた。義父の体調がよいときなら、一泊くらいは夫とのんびりしたかった。しかし、

「ヒートショックが心配だから、親父の家で暮らそうと思う。久住にはカヨさんと一緒に行って、温泉でも楽しめばいい」

夫は病身の義父が心配で決めたようだが、カヨと三年も同居しているのに、なんにもわかっていない人だと緑は目を伏せた。

「暗くなっても電気はつけないし、暖房も『まだいい』って使わないんだ。近頃は戸締りも面倒になっているからな」

夫は実家へ出掛ける朝、特大の赤い買い物バッグに荷物を詰め込みながら言った。彼の服装は介護士と同じようなトレーニングウェア姿だ。動きやすいし、汚れてもすぐに着替えられるからだ。

「今年はやめるわ。お義父さんの体調も心配だから」

肉親とは妙なもので、会食や旅行中に不慮の事故や病気の知らせがよく来た。それに、カヨと一緒の旅でのんびり楽しめるはずがなかった。

「そうか、すまない」

夫はカヨが現れる奥のドアに目をやると、足早に玄関に向かった。

まだ動いている鳩時計が八時を知らせたから、そろそろカヨが朝食に来る時間だ。廊下の奥で足音がして、途中で立ち止まらなかったから、今朝の背中は痒くないようだ。

「オッハー、あら、おとーさんは」

緑より先に夫の定位置の椅子を見ている。

「さっき、実家へ出掛けたわ」

夫がしばらく実家で暮らすことは言わなかった。最近は「おとーさん、おとーさん」と、甘えたような声にも聞こえる。しかし、夫とカヨが険悪な関係になり、その間で緑が悩むよりはましだと思う。歓迎した同居ではなく、魔が差した同居だったが、距離がなくなると見えなかったものが目前に積み上げられて落胆している。これに将来、カヨの介護が必要になったら最悪だ。しかし、カヨも緑との生活に裏切られた思いはあるはずだ。それが、日々の暮らしの

中で大胆に顔を出していた。
「ねえ、おとーさんは、いつ帰ってくるの」
カヨはまるで幼子のように、肩を前後に揺らしながら尋ねた。
「お義父さんの体調次第だと思うわ」
緑は新聞を眺めながら言った。
「困ったわね。今日にでもセーターの丈を決めたかったのに」
朝食より夫を気にしている。
「セーターを編んでいたの？」
緑には初耳だった。
「そうよ。前に採寸していたけど、数字が薄くなってわからなくなったの」
「セーターはあまり着ないわ」
帰宅後の夫はすぐにパジャマに着替えてソファで横になっていた。詳しい介護の様子は口にしないが、入浴、トイレ、掃除と重労働の一日なのだろう。
「寒くなる前に上等の毛糸で編んでやるの」
カヨはかならず実行するような口ぶりで、冷蔵庫のドアを強く閉めた。
今朝、家を出た夫から電話があったのは、庭で洗濯物を干しているときだった。以前、緑が植えていたクレマチスやダリアも、リュウキュウアサガオに負けて年々花が貧弱になっていた。秋の庭もカヨが植えた花が征服者だ。
「ちょっと話があるから、買い物がてら出てこられないかな」
ゆっくりとした、いつもの口調だった。
「お義父さん、また体調がよくないの？」
「いや、親父ではなくカヨさんのことで」
「えっ、おとーさんのセーターを編んでいるって喜んでいたけど」
二人は不仲には見えなかった。夫をカヨが「おとーさん」と呼ぶのは、この家の主として捉えているとも思っていた。外での話とは厄介なことに決まっている。緑はカヨの洗濯物を干すのも面倒になった。
夫と二人っきりで車の中で話すのは久しぶりで、こんなに近くで顔を合わせるのも珍しかった。今朝は髭を剃らずに出たようで、顎のあたりの髭の中に、ポツンポツンと白髪が光っていた。
このスーパーは家から車で十分かかるが、広い駐車場があるので緑はここばかり利用していた。今日はポイント五倍デーだから、客の出入りが多かったが、それよりカヨの件が気になって仕方がなかった。